

「おきなわの木づかい」親子学習ツアーに向けて

1. イスノキのサイオン ～子どもたちへ～

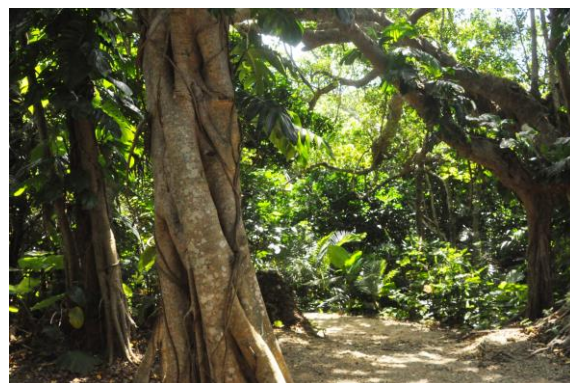
①楽しい森の生活

イスノキの「サイオン」は沖縄のヤンバルで生まれ現在10歳になります。身の丈は2メートル。成長の遅いイスノキは周りの木に比べてまだ小さいのです。またサイオンのお腹の辺りには他のイスノキにはない四つの黒い斑点があり、そのため、周りの木達から「やーい。みにくいチビの斑点〜っ」とからかわれていました。「なにくそ。僕は今に立派な木になってみせるぞ。」サイオンは、いつもこう自分に言い聞かせていました。

サイオンの周りにはいろんなたくさんの木がいますが、中でもイタジイのカナーおばさんは50歳を超え、頭の冠は周囲10メートルほどまで広がっており、サイオン達小さな木はカナーおばさんに守られるように生きていました。サイオンと一番の仲好しは隣に立っているエゴノキのジロー。ジローもサイオンと同じ10歳ですが、成長の早いエゴノキはすでに5メートルを超え、周りの大人達にもうすぐ並ばんばかりの勢いです。サイオンはジローがとてもうらやましく、いつもこう言います。「ジロー、君は本当にかっこいいね。色も白くて、まっすぐ立っていて。うらやましいよ」ジローもサイオンが大好きです。「サイオン、君の方こそ身長は小さいけど、体も堅くて丈夫でたくましいよ。君は大きくなったらきっとこの辺りで一番の木になるだろうな」

昼間の森はとても賑やかです。カナーおばさんの頭の上ではいつもアカヒゲやノグチゲラなどの小鳥たちが合唱しています。「カナーおばさん、おはよう。今日も一日よろしくね」小鳥たちの挨拶にカナーおばさんが歌います。「どうぞ〜遠慮なく。私の葉っぱに隠れていれば怖いカラスが来ても大丈夫だよ〜。そこの虫さん達〜、私の葉っぱをいっぱい食べて大きくなるんだよ〜」カナーおばさんの歌に合わせて小鳥はチュンチュン、葉に隠れている小さな虫はジージーと羽を鳴らし、周りのカブトムシたちも木の汁を吸おうと大忙しです。小さな小川には魚が泳いでいますが、サラサラと流れる水の音はサイオンの耳にとっても心地よく、そよ風が吹くとシャワシャワとサイオンの枝葉が擦れ少しこそばゆい感じですが、これがまた気持ちいいのです。

サイオンはこのような森が大好きです。



②恐ろしい夜の顔

あるみんなが寝静まった真っ暗な夜のこと。ガサガサという音でサイオンは目を覚ましました。見ると大きなハブがカナーお婆さんの枝に住み着いているアカヒゲの巣を狙っています。「危ないよっ。みんな起きて！」サイオンは一生懸命葉をこすってみんなを起こそうとしますが一向に起きる様子がありません。そのうちに、ハブは大きく口を開けてアカヒゲの雛3羽をゴクンと呑み込んで帰ってしまいました。「あー、恐ろしい。夜の森は怖いなあ」サイオンは恐怖でガクガク震えていました。朝起きるとアカヒゲのお母さんは、わが子がないことに初めて気がつき泣き崩れしまいました。

そんなことがあってから数ヶ月後のある夜のこと。また、あの大きなハブがカナーお婆さんのところにやってきました。今度はノグチゲラの卵を狙っているようです。すると、サイオンの後ろからドスッ、ドスッと誰かが近づいてきます。イノシシです。ハブがカナーお婆さんの枝に登ろうとしたその時、イノシシは一気にハブの上ののしかかりました。ハブはイノシシに歯を立てて必死に噛みつきますがイノシシは全く意に介しません。イノシシにハブの毒は通用しないのです。そのうちにイノシシはあっという間にハブの頭をかみ砕いてしまいました。ガシッ、ガシッ。ハブは体をくねらせバタバタしていましたが、そのうちグッタリと動かなくなりました。イノシシはハブを尻尾まで全部食べてしまいました。先日鳥の雛を襲い残虐だと思っていたハブが、今はこうして哀れにもイノシシに食べ尽くされている。サイオンは森の持つ非常さを身にしみて感じていました。

イノシシは、赤ちゃんを身籠もっていました。しばらくするとカナーお婆さんの根っこを掘り出しそこに住み着き、赤ちゃんを産みました。2頭のかわいいウリ坊です。お母さんイノシシは2頭のウリ坊にご飯を与えるため、毎日せっせと食べ物を取りに出かけます。ミミズや小さな虫、たまにはウナギも採ってきたりしました。それから半年ほどすると2頭のウリ坊も立派な青年イノシシとなりました。

ある日を境にお母さんイノシシの姿が見えなくなりました。向こう岸の森からの噂によると、お母さんイノシシは、人間のかけた罠に捕まってしまい、生きたままどこかに連れて行かれたとのこと。きっと、人間に殺されて食べられてしまったのでしょう。

2頭の青年イノシシは、はじめメソメソと泣いていましたが、お母さんはもう帰ってきません。そのうち悟ったのか2頭で狩りに出かけるようになりました。そして気がつくといつの間にかどこかに引っ越していなくなっていました。



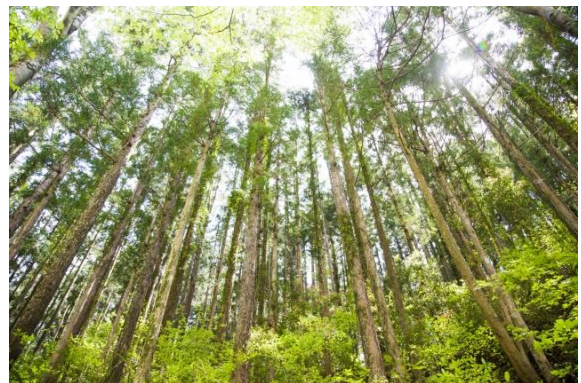
③友だちとの別れ

それから何十年か過ぎて、サイオンも40歳になり立派な大人の仲間入りを果たしました。それでも隣のジローにはかないません。ジローは高さ15メートル、幹の太さは40センチにも届こうという立派な木になっていました。

ある日、人間がサイオン達の森に突然やってきました。そしてジローの前に立ち止まって何か話し込んでいます。「こいつは立派なエゴノキだ。きっといい琉球漆器になるぞ」そうこうしているうちに、人間はジローの根元をノコギリでギコギコと切り出しました。「あっ！ジロー、大変だ。君が倒されちゃうよ」ジローはジッとして人間のなすがままに任せています。そのうちジローは地面にドスンという音を立てて倒れ、枝や葉っぱを全部むしり取られ丸太にされてしまいました。人間はそれを1メートルほどの長さに玉切りにして外に運び出していきます。今にも泣き出しそうに見つめているサイオンにジローは誇り高い表情を見せながら「サイオン、これでいいんだ。僕はきっと立派な食器になってみせるよ。君はもっと立派な木になるはずだ。サヨウナラ」あつと言う間の出来事でした。

親友を失ったサイオンはしばらくがっかりしていましたが、今ではサイオンを頼りにしている生き物がたくさんいます。隣のカーお婆さんは10年前大きな台風で根こそぎ倒れてしまい、この辺りではサイオンが一番大きな木になっていたのです。「サイオン、元気を出して。あなたがいないとみんな生きていけないよ。」その声はサイオンの根元に住んでいるケナガネズミでした。

「そうだ。僕がへこたれていたらみんなに迷惑がかかってしまう。僕もジローみたいに立派な木になるぞ」サイオンは固く決意しました。



④厳しい自然界の掟

それからしばらくして、隣の森で異変が起きました。100歳を超えるガジュマルを人間が切ろうとしていたのです。このガジュマルは体に白い布が巻かれており周辺の人間から「神木（しんぼく）」と呼ばれていました。また、ガジュマルにはキジムナーが守り神のように寄り添っています。

人間同士が何か言い争っています。「この木は、きっと高く売れるぞ」「やめろ。この木を切ったら罰が当たるぞ」「そんなのは迷信だ。構わねえよ」一方キジムナーは恐ろしい表情で彼らを見下ろしながらブツブツつぶやいています。「伐って見ろ。ただじゃおかねえぞ」

人間は構わずガジュマルの木を切り倒しました。その倒れようとする瞬間キジムナーは大きくギョロリと目をむくとガジュマルを人間の方向に倒していったのです。「ギャーツ」人間は悲鳴を上げるとガジュマルに押しつぶされ、そのまま動かなくなりました。しばらくして救急車が人間を運んでいきましたが、手遅れだったようです。「いくら人間でも森の掟を破ってしまえば必ずしっぺ返しを受ける」サイオンは改めて厳しい自然界のルールを胸に刻むことになったのです。



⑤森との別れ、人との出会い

それからさらに何十年かして、サイオンは100歳を迎えていました。高さも20メートルを超え、幹の太さも50センチを超えるまでになっていました。また、サイオンのお腹にあった4つの黒い斑点は、今では四つ葉のクローバーを連想させるような見事な模様生まれ変わっており、さっそうとしたサイオンの立ち姿は、まさに森の守り神のような威厳を放つまでになっていたのです。

もうこの辺りにサイオンより大きな木はありません。サイオンの冠に巣を作っているアカショウビンの鳴き声で朝の目覚めを迎え、サイオンの根元にはイノシシが巣を作り、虫たちはサイオンの葉っぱを腹一杯食べ成長していきます。サイオンは歌います。「どうぞ～遠慮なく。私の葉っぱに隠れていれば怖いカラスが来ても大丈夫だよ～。そこの虫さん達～、私の葉っぱをいっぱい食べて大きくなるんだよ～」。

そして、サイオンはいつの間にか周辺の生き物たちから「主（ぬし）」と呼ばれるようになっていました。

しかし、このような太平の時間はいつまでも続くわけではありません。

ある日サイオンの足下にやはり人間がやってきました。「この木はどうですか？」「うん、何という見事な木だろう。是非この木にしてもらいたい。」そんなやりとりがあった後、人間達はサイオンの根元をノコギリで切り始めました。大騒ぎになったのは、サイオンを住処にしている鳥や虫たちです。「大変だ。サイオンが倒されようとしているよ」まるで蜂の巣をつつくような騒ぎです。しかし、サイオンはジッと静かにみんなを見つめながらこう言ったのです。「みんな、いいんだよ。来るべき時がきたんだ。僕はこれから人間と一緒に生きていくことになるからね。森のことはみんなに任せたよ。サヨウナラ」大きな音を立てて地面に倒れた後、サイオンは気を失ってしまいました。

その後1年ほど過ぎたでしょうか？サイオンは四角い箱の中から取り出され、まぶしい光を浴びて目を覚ましました。「ここは一体どこだろう？」「僕はどうなったんだろう？」目の前には赤ちゃんがいます。すると人間の声が聞こえてきました。「さあ、ヒ

ロシ、君のために作った玩具だよ。これを積み重ねて遊ぶんだ。大きく逞しい子になってくれよ」。赤ちゃんの名前は「ヒロシ」。サイオンは立派な積み木になっていたのです。しかし、辺りを見回すと見覚えのある模様があります。四つ葉のクローバーです。「あれ？あれは僕の幹の部分だ。こちらは僕の枝の部分だ」。そうです。サイオンの体は家の柱や壁にも使われていたのです。サイオンの顔の小さな部分は子どもの玩具として積み木になっていたのです。

状況を察したサイオンは改めて赤ちゃんに向き直り挨拶しました。「ヒロシ君か。これからよろしくね」

それから毎日のようにサイオンはヒロシ君と遊ぶことになりました。ヒロシ君は夢中でサイオンを積み重ね、またガラガラと崩してはの繰り返しです。サイオンが崩れるときの音がとても好きなようでした。

そんなある夕方のこと。この家の人たちが晩ご飯の準備をしていたときのことで。「サイオン、久しぶりだな。ずっと君が来るのを待っていたよ」と言う声がします。「誰だろう？」振り返ってみるとそこには真っ赤な器の琉球漆器がありました。「もしかして君は？」それはサイオンが若い頃いつも一緒だった大好きなジローでした。何と60年ぶりの再会でした。「サイオン、やっぱり君は立派な木になったね。この家の人たちはみんな君を歓迎しているよ」「ジロー、君の方こそこんな立派な食器になったじゃないか。」二人は再会を喜びました。「また、一緒に暮らせるね。よろしく」

それからさらに5年ほどするとサイオンはまた箱の中に閉じ込められてしまいました。ヒロシ君が小学校に入学したため、サイオンは必要なくなったのです。「仕方ないや。これが運命だから」サイオンは潔く諦めジッと箱の中で何年も過ごしました。

20年ほど過ぎた頃です。再びサイオンは箱の中から取り出され赤ちゃんの前に置かれました。「さあ、アカリ、これがお父さんが小さい頃遊んでいたイスノキの積み木だよ」。その声は何とヒロシ君でした。ヒロシ君はいつの間にかお父さんになっていたのです。「アカリちゃんか。よろしくね。」再びサイオンと子ども達との付き合いが始まりました。しかし今度はサイオンは箱に閉じ込められることはありませんでした。ヒロシ君に孫ができて子ども達がたくさん増えたため、いつでもサイオンが必要とされていたのです。

それからさらにさらに月日が過ぎて、サイオンもこの家に来てから100年を迎えていました。赤ちゃんだったヒロシ君はみんなに「ひいひいおじいさん」と呼ばれ子ども達に囲まれとても幸せそうでした。しかし人間にも寿命があります。ヒロシ君が100歳を迎えた後急に体調を崩しついに天国に行くときが来ました。サイオンも体を使い果たし、もうボロボロの状態になっていました。親友のジローもヨボヨボです。

いよいよヒロシ君が臨終を迎えた夜、サイオンとジローはヒロシ君と一緒に棺の中に入られることになりました。ヒロシ君の遺族はみんな泣きながらこう言っています。「おじいちゃん、天国に行くときは1人では寂しいから、思



い出の玩具と食器も一緒に持って行ってね」。

「サイオン、お互いいい生涯だったな。君と一緒に過ごせてとても幸せだったよ」「僕の方こそ。ジロー。君とは天国でも一緒になれるといいな」そんなことをささやき合ううち棺に火がつけられました。

ヤンバルの森に100年、ヒロシ君の家に来てから100年、サイオンはいよいよ200年の生涯を閉じようとしているのです。

⑥森は永遠に

サイオンは自分の体が全て燃え尽き煙となって天国に登ろうとするとき、そばに付き添っていた神様にこうお願いしました。「神様。天国に行く前に僕の生まれたヤンバルの森をもう一度見せてもらえませんか?」「いいよ。行っておいで」

「あれからヤンバルの森はどうなったんだろう?みんな元気かなあ。」サイオンはヤンバルの空の上から自分が生まれ育った森を眺めていました。相変わらず小鳥たちやイノシシが森の中を自由に駆け回っています。しかし、知ってる生き物は誰もいません。100年を過ぎてみんな生まれ変わっていたのです。またサイオンが立っていた場所には大きく立派なイスノキが凜とした姿で立っていました。このイスノキもたくさんの生き物たちを迎え入れ、みんなから「主」と言われているようです。そしてあの歌が聞こえます。「どうぞ～遠慮なく。私の葉っぱに隠れていれば怖いカラスが来ても大丈夫だよ～。そこの虫さん達～、私の葉っぱをいっぱい食べて大きくなるんだよ～」

「あっ。あれは!」よく見ると、このイスノキはお腹に大きな四つ葉のクローバーの斑点を抱えていました。そうです。このイスノキはサイオンの子どもだったのです。サイオンが人間と一緒に過ごしている間に、森の中では立派な後継者が育っていたのです。サイオンは安心しました。ヤンバルの森は、これからも未来永劫にわたり、ずっと多くの生き物たちを育み、また人間の生活に憩いと潤いを与えていくことでしょう。

「さあサイオン、みんなが待ってるぞ。行こうか。」神様の声に思わず天上を見上げると、そこにはあのカーナーお婆さんが立っていました。「サイオン、待ってたよ。早くおいで。」あのイノシシやハブもいます。そばにはジローも寄り添っていました。そして何とヒロシ君も一緒に登ろうとしていました。「君はサイオンというのか。思い出を本当にありがとう」初めてヒロシ君と話をしたのです。

「みんなありがとう。僕は本当に幸せな生涯だったよ」

サイオンは、みんなに迎えられながら天国に登っていきました。



2. 沖縄の森は宝の山 ～お父さん、お母さんへ～

沖縄の森は宝の山です。いろんな生き物が共存するとともに、人も森林からの恵みを享受しながら独特の地域文化を育んできました。

明るい昼間には、大きな樹木が地面に堂々と根を張り逞しく聳えている姿が目映ります。また、このような沖縄の木には様々な生き物が共存しています。高い木の枝から漏れ聞こえてくる鳥のさえずりや虫の奏でる音色、小川の方からはリズムカルな水流の調べ、さらに私たちの周りには風が織りなす小枝や葉っぱの擦れ合う音が溢れ、これらが実にうまく噛み合い、まるで協奏曲のハーモニーや絵画の色彩のように見事な調和を生み出しています。

これに対して、夜になるとその様相は一変します。森の中の生き物は大半が夜行性なので、これらの生き物が一斉に活動を始めます。リュウキュウイノシシやハブ、リュウキュウコノハズクなどの捕食動物は自分の餌になる生き物を食欲に探し求め、対してヤンバルクイナやトゲネズミなどは、これらの天敵から身を守るためジッと息を潜め、静かに行動します。このような私たち人間の目では捉えられない暗闘が真っ暗な森の中では繰り広げられており、しばらくその中に身を委ねていると、まるで魔界に紛れ込んだのではないかと錯覚しかねないような恐ろしい表情も、沖縄の森は持ち合わせているのです。

一方、私たちの祖先はこのような森の中から生活に必要なモノを、長い年月をかけて調和を壊すことなく、綻びを縫い合わせるように上手に利用してきました。

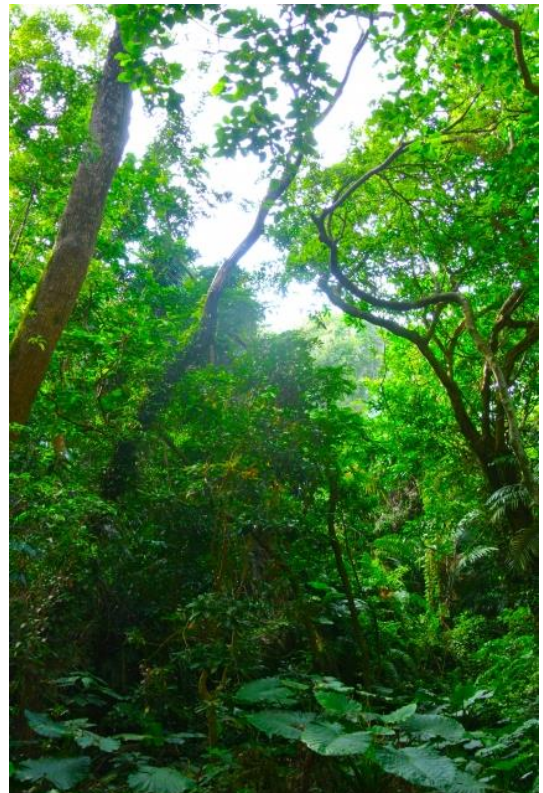
家の柱や家具として使用する木材、ヒンプンなどに使う竹、キノコや山菜・タケノコなどの食材、などなど、その用途は枚挙にいとまがありません。

中でも特筆されるのは、家具や柱材として利用される「木」です。

沖縄の木は、樹木として生きている間は森の生き物たちに生活の糧を提供し、何十年、何百年に亘り彼らを見守る生き証人として、また一旦伐られた後は、柱材、家具材などに利用されることによって新たな「生」を授かり、これまた何十年、何百年に亘り人とともに歩んでいくのです。

しかも、沖縄の木は300種類以上にのぼり、これらの樹木が地形や場所によってもそれぞれ木の形が異なっていることから、その多様性は大変な数に上ります。加えて森の生き物達のドラマを掛け合わせると、天文学的数量の物語が育まれていることになるのです。

このように人の想像を駆り立てる物語の奥深さ、豊富さ、多種多様性による木の用途のバラエティさなど様々な視点から捉え直してみると、沖縄の森はまさに宝の山といえるのです。



さて、このような沖縄の森の宝物を長期的・安定的にお手元にお届けするには自然環境保全とのバランスや継続的な資源再生が必要になります。

例えば、ヤンバルテナガコガなどの希少昆虫やキノコ類などは、市場規模に合わせて収穫すると、あっという間に枯渇してしまいます。

長期的な収穫が計画的に行われ、かつそれを担保する技術が確立されているかなどを考え合わせると、唯一皆さんに安心してお届けできる森からのプレゼントは、やはり樹木から生み出された木製品ということになるのです。

3. 100年愛される「森からのプレゼント」 ～私たちの願い～

是非とも、このような森からのプレゼントを手元に大切に慈しみ、リラックスしていただくとともに、森と人との深い絆・愛情・畏敬の念を確かめ、そして自らが自然環境の一員として、さらにその保全に貢献しているという意識を持って毎日を快適に過ごしていただきたいと思います。

また、わたしたちは、沖縄の森から生み出された製品を100年愛されるモノにしたいと願っています。

皆さんが購入した沖縄の木製品を、孫やひい孫、玄孫、さらにはその子孫まで大切に使用していただきたい。その間、森の中では次の世代の木が育ってきます。

このように100年先まで見据えた「木づくり・木づかい」を進めていきたいと考えています。

このような願いを込めて、沖縄の県産材から生み出されたすばらしい一品をお届けしたいと思います。

